

A・MUSEUM

vol.82
〔2015.3.10〕



ミュージアムパーク
茨城県自然博物館



初雪降って(第18回「いばらき自然環境フォトコンテスト」入選作品 撮影:酒井 保 撮影地:大子町)

わら塚

稲作の副産物である「稲わら」は、以前は重要な農業資源であり生活資源でした。縄、むしろ、わらじ、屋根、納豆のわらづと、しめ縄などになるほか、飼料、肥料、燃料としても重要でした。

稲刈り脱穀でできたわらは、そのまま放置すると、雨などで腐り使い物にならなくなります。わら塚にすると、表面は傷みますが中は守られ、順次使うことができます。わら塚は、わらぐろ、わらぼっち、わらこづみなど、地方によりよび名がたくさんあります。

近年稲わらは、コンバインによる収穫で粉碎され田んぼに直接すき込みしてしまうこと、生活様式の変化により用途が激減したことにより、ほとんど生産されなくなっていました。わら塚はなかなかみることができない風景となりました。(企画課 小幡和男)



稲わら加工品のいろいろ (写真提供: 岩手県農業科学博物館)

第62回
企画展

マンモスが渡った橋 —氷河期の動物大移動—
Ice Age Monsters

第62回企画展「マンモスが渡った橋—氷河期の動物大移動—」を2014年12月20日(土)から2015年6月7日(日)まで開催しています。ここでは企画展の大きなみどころとなる資料について紹介します。

展示室入り口には、ケナガマンモスの実物大復元模型が展示されています。これは1971年にシベリア東部で発掘された約3万年前のケナガマンモスの全身骨格から復元された標本です。高さ約3m、推定40歳のオスの個体で、発見場所の川の名前にちなんで「チレフチャフ・マンモス」とよばれています。所蔵館である北海道立北方民族博物館と、ロシア連邦サハ共和国の国立ヤクーツク北方民族歴史・文化博物館によって2005年に学術的な研究成果に基づいて制作されました。体毛の再現は約400頭分のウマの毛を使用しているため非常にリアルにできています。学術的に復元されたマンモスの実物大模型は日本国内ではとても希少であるため、今回は北海道の網走から長距離の輸送を行いました。マンモスの模型が解体・輸送されて当館で組み立てられるようすは、展示室のタブレット端末で紹介しています。

北米ランチョ・ラ・ブレアの動物たちのコーナーでは、サーベルタイガーの実物全身骨格が展示されています。

これは、2000年、当館の特別企画展「サーベルタイガーと開館5年のあゆみ」の開催を機に、姉妹館であるロサンゼルス郡立自然史博物館(以下ロス博)から長期借用している標本です。この標本はロス博の移動博物館で利用されていたもので、全身が実物化石で組み立てられた希少な標本です。このほか、今回の展示のためにサーベルタイガーの幼体と成体の犬歯のレプリカを寄贈してもらうなど、ロス博から多くの協力をいただきました。このコーナーではサーベルタイガーのほか、ダイアウルフやオオナマケモノなど現在は絶滅してしまった大型哺乳類たちも展示しています。(教育課 加藤太一)



サーベルタイガー実物全身骨格 (所蔵:ロサンゼルス郡立自然史博物館)



実物大のケナガマンモス復元模型 (所蔵:北海道立北方民族博物館)



サーベルタイガーの幼体および成体の犬歯(複製標本)

会期 2014年12月20日(土)～2015年6月7日(日)
開催時間 9:30～17:00 (入館は16:30まで)
休館日 毎週月曜日
※3月30日(月)は開館します。
※5月4日(月)、5月5日(火)、5月6日(水)は開館し、5月7日(木)が休館となります。

●特別映像上映会「アイスエイジ -TITANS OF THE ICE AGE-」
開催日: 3月21日(土)、28日(土)、29日(日)
時間: 各日 10時～、11時～、13時～、14時～
場所: 博物館3階映像ホール
対象: どなたでも(当日受付)
定員: 280名(先着順)

●企画展記念シンポジウム「日本の第四紀環境変動と生物相の変化」
開催日: 5月17日(日)
時間: 13:30～15:30
講師: 横山裕典氏(東京大学)、百原新氏(千葉大学)、甲能直樹氏(国立科学博物館)

場所: 博物館内
対象: 小学4年生以上(小学生は保護者同伴)
定員: 30名(先着)

●自然観察会「古東京湾の貝化石を探しに行こう！」

開催日: 5月24日(日)
時間: 10:00～12:00
場所: 霞ヶ浦周辺(現地集合)
対象: 小学生以上(小学生は保護者同伴)
定員: 30名(抽選)
参加費: 要参加費

●自然講座「茨城から産出した第四紀の生き物たち」

開催日: 6月7日(日)
時間: 13:30～15:00
場所: 博物館内
対象: 小学生以上(小学生は保護者同伴)
定員: 30名(先着)

お客様をお迎えするための安全で快適な環境づくり 20年のあゆみと今後の展望4

20年のあゆみと今後の展望のシリーズでは、「博物館の根幹を支える資料の収集と研究」、「企画展の開催」、「教育普及活動について」と題して、資料課、企画課、教育課の主な取り組みを紹介してきました。最終回は、管理課の取り組みとして「お客様をお迎えするための安全で快適な環境づくり」です。

開館時に策定された運営指針では、当館の機能を「一般機能」と「基礎機能」に二大別しています。一般機能は、博物館の「表の顔」である教育普及機能と文化的機能とし、基礎機能はお客様の目に触れることが少ない資料収集整理保管、調査研究、施設管理・維持として、各課の業務の位置づけを明確にしています。

開館から20年が経過し、近年では年間入館者数40万人超を目標として運営に取り組んでいます。来館者アンケートによりますと、近年のリピート率は約7割です。これは良い評価をいただいている結果であり、博物館の一般機能としての役割を果たしているものと捉えています。また、このことは、少なくなる事業予算を職員が一丸となってアイデアとマンパワーで補い、来館者に「おもてなしの心」(Hospitality)をもって対応してきた成果であると考えています。

当館の施設は、本館で「地球の自然」をさまざまな

資料を通して学び、野外を「生きた展示」として捉えて自然体験を通して豊かな感性を養う場とする「本館と野外の一体化」が特徴です。今後も博物館が魅力あるものとして来館者に親しまれていくためには、それぞれの状態を良好に保っていくことが必要です。

基礎機能の1つである施設管理・維持については、縮減した予算の範囲で工夫しながら整備を行ってききましたが、施設設備の経年劣化が著しく、改修が追いつかない状況となっています。しかし、平成27年度には施設管理・改修に関する予算増が認められ、施設管理の面でも明るい兆しがみえてきました。今後は、施設設備および展示の改修更新、「お客様の声」で意見をいただくことの多いトイレの洋式化も含め、緊急性の高い改修を優先し長期的視点に立って適切な改修を行い、お客様にとって安全で快適な環境づくりに取り組んでいきたいと考えております。

20周年以降もこれまで同様に、ボランティアや地域の方々の協力を得ながら「自然と共生し、市民と協働する博物館」を目標に活動し、利用者の皆様から私たちの博物館(Our museum)とっていただけるよう、また、誰もが親しめ、誰もが気軽に楽しめる“A・Museum”を目指して取り組んでいきます。(管理課 関 勤)



本館（写真左）と野外（写真右）の展示は一体のものである

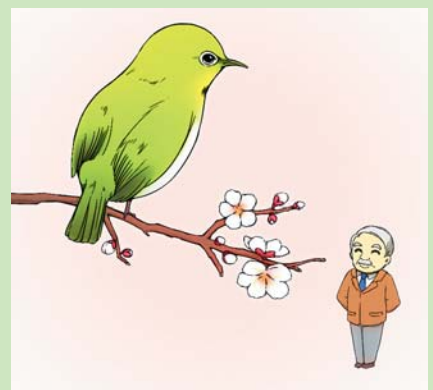
春告鳥（メジロ）

日に日に暖かさを増すこの季節になると、我家のささやかな庭にもスズメ、ムクドリ、ヒヨドリ、ジョウビタキ、キジバトなどの野鳥が食事にやってきます。容器にパンやご飯を入れた餌台に最初にくるのが賑やかなスズメの集団ですが、それを追い払い夫婦連れのムクドリがやってきます。そしてキジバトが舞い降りるとほかの鳥たちは退散します。

今の季節ですとメジロが椿の蜜を吸いに頻りに訪れます。ときどき落

下寸前のゆずの実も突っついていて、甘いものが大好きです。眼の周りの光沢のある白いリングが特徴で、すぐ判別できます。蛋白源として小昆虫も食べるようですが、実際にみたことはありません。臆病で、人の気配を感じるとすぐに飛び去ってしまうからです。メジロは「チュルチュルチュー」と早口で鳴きます。鳥たちの恋の季節でもあるようです。小庭の鳥たちが季節の移ろいを教えてくれます。

コラム by director SUGAYA



イラスト：池上侑花(ミュージアムコンパニオン)

中生代の植物を復元する

研究ノート 1

私はおもに中生代ジュラ紀後期(1億5000万年前頃)の植物について研究してきました。植物化石の研究は細胞学的なものが主流ですが、私の研究フィールドである福島県相馬地方の化石は、細胞が残されているようなものはありません。そこで最近力を入れているのが、植物の全体像の復元です。植物の場合、発見される化石は全体のほんの一部のみで、全体の姿がわかるようなものはまずあり得ません。それでも、重要な部分が残された化石などを手がかりにしたり、断片的な情報を組み立てたりして全体像の復元を進めています。

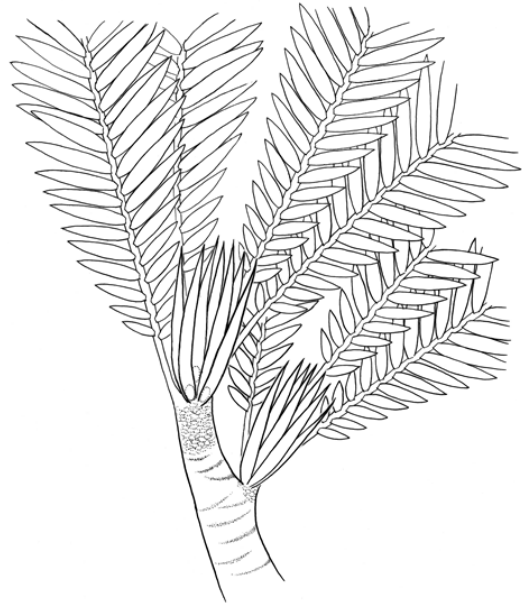
昨年の夏、イタリアのパドヴァ大学で植物化石と花粉の研究者が世界中から集まった学会がありました。その会場では同じようなテーマで研究をしている仲間たちと発表やディスカッションを通して親交を深めることができました。特にスウェーデン国立博物館のクリスチャン・ポット氏とは同じような時代や植物の分類群の材料を研究対象にしていることから、たいへん有意義な意見交換ができました。私も彼もこれまで教科書的な文献に掲載されてきた復元とは全く異なる形の植物を思い描いており、彼とは今後も共同で研究を進めていくことになりそうです。

復元図を描くにはいくつかのポイントがあります。その1つが、葉がどのように枝や茎から出ているかという点です。このような部分が保存されている化石は本当にまれで、たいへん貴重な存在です。また、どのような繁殖器官(花・種子など)がどこについているのかも重要です。繁殖器官は短期間しか植物本体についておらず、発見される数が少ないだけでなく、単体で見つかるのがほとんどだからです。

恐竜の映画や図鑑などには当時の植物が登場しますが、学術的にはまだまだです。羽毛が生えた恐竜を目にすることが増えてきましたが、植物も当時の姿を再現できるよう地道な努力を進めていきます。(資料課 滝本秀夫)



ベネチテス類(ウィーランドイラ)の復元図(Pott, 2014) グリーンランドの三畳紀の地層から発見された化石を基に描かれた植物。ベネチテス類は中生代末に絶滅した裸子植物で恐竜が食べていたと考えられている。



ベネチテス類(ザマイテス)の復元図(Takimoto and Ohana) 福島県のジュラ紀の地層から発見された化石を基に描いた植物。発表予定の論文に掲載される復元図の一部。

恐竜

右の絵をご覧ください。こちらは当館第2展示室で展示されているタイムリボンの一部です。さて、ここで問題です。この絵の中に恐竜は何頭いるでしょうか。正解は、3頭です。

一般的に、恐竜という言葉は、大昔の大型爬虫類全般を指して使われることが多いですが、学術的には直立歩行をする爬虫類のことをいいます。したがって、この絵の中では、ティラノサウルス、トリケラトプス、

ブラキオサウルスの3頭が、恐竜とよぶことのできる爬虫類です。

空を飛んでいるプテラノンは翼竜、海を泳いでいる首の長い爬虫類は首長竜、現在のイルカのような形をしている爬虫類は魚竜とよばれています。これらはよく恐竜と混同されますが、異なる分類群の生きものです。また、首長竜はその名の通り、首の長い種が大半ですが、首の短い種も発見されています。

(ミュージアムコンパニオン 小川真依)

小さな発見—ミュージアムコンパニオン—



恐竜などの中生代の生き物たち

県内初記録?! 清音寺のイトゴケ

研究ノート 2

清音寺（東茨城郡城里町）は、茨城県の3大銘茶のひとつ「古内茶」の発祥の地として知られる由緒あるお寺です。境内には徳川光圀公がその味を絶賛したといわれる古木をはじめ、チャノキが数多く植えられています。古くからの豊かな自然が残る清音寺ですが、コケ植物については調べられたことがなく、2013年12月に博物館ではじめての調査を行いました。

付近に川が流れる清音寺は、とても湿潤な環境であることがコケ植物のようすからもうかがえました。境内に入るとすぐに、湿気を好むコケ植物が絨毯を敷いたように広がっています。高揚する気持ちを抑えながら調査を行っていくと、すぐに、チャノキやツバキ類の枝から垂れ下がる、細長いコケ植物が見つかりました。県内では、このようなコケ植物はキヨスミイトゴケしか知られていません。キヨスミイトゴケは溪流沿いなどの湿潤で十分に自然が残された場所ではみることができず、県内でも生育地は限られています。まさかお寺の中でみつかるとは・・・と興奮しながら採集袋に「キヨスミイトゴケ」とメモし、その日の調査は終了しました。後日、一緒に調査した研究者と話した際、「キヨスミイトゴケよりも全体的に細く、もしかしたらイトゴケかもしれない」と気づきました。



清音寺のチャノキに生えるイトゴケ

イトゴケだとすれば、県内ではじめての発見です。

2014年10月、観察会「コケと古内茶を学ぶ会 in 清音寺」を行うことになり、改めて調査と標本の観察を行いました。顕微鏡でじっくり観察すると、キヨスミイトゴケとは明らかに細胞の表面の形が異なり、イトゴケの特徴を示していました。早く確認しなかったことを悔やみながらも、念のため国立科学博物館の研究者に確認してもらうことにしました。

観察会当日、確認は間に合わなかったのですが、参加者に途中経過をお知らせしました。「このコケは、茨城県では今までみつかっていなかったイトゴケかもしれない。今、ほかの専門家に確認してもらっていますので、結果を楽しみにしてください。」とコケ植物が垂れ下がる木を前に解説すると、参加者の目が期待できらりと光ったような気がしました。

後日、国立科学博物館からイトゴケであるとの連絡があり、晴れて発見は確かなものになりました。その後、別の研究者により八溝山にも生育していることがわかり、県内のイトゴケの産地は2か所になりました。これからも、小さな発見を大切にしながら、茨城県内のコケ植物を調査していきたいと思います。

（資料課 鶴沢美穂子）



境内での観察会のようす

オオクチバス

オオクチバスは、スポーツフィッシングにおける俗称「ブラックバス」として知られます。

もともとは北アメリカ南東部原産の魚類で、大正時代に芦ノ湖に移植されました。その後、野放図な放流によって生息域を広げ、日本全国に分布するようになり、今では特定外来生物に指定されています。食性は小魚を主食とし、非常に貪欲で湖や沼の在来魚を食べてしまうなど生態系を乱すことが問題となっており、

現在は外来生物法で飼育および放流が禁止されています。当館では特別に許可を得て飼育しています。

当館のオオクチバスは普段水槽内をのんびり泳いでいますが、餌のアジやイカを与えるとその名のとおり大きな口で勢いよく食べる、迫力ある姿をみることができます。ときには、口を大きく開けてあくびをしているようすもみられます。

迷惑者のイメージがつくオオクチバスですが、当館でご覧いただき、

おさかな通信

あらためて生態系について考えてみてはいかがでしょうか。

（水系担当 藪内雅英）



オオクチバス

リース・クレーター

新展示紹介

第1展示室「惑星の自転と公転」の展示が「巨大隕石の衝突とクレーター形成」という新しい展示に生まれ変わりました。ここでは、ドイツのバイエルン州にあるリース・クレーターを立体地図と実物資料で紹介しています。

宇宙空間にあった小天体が地球の重力に捉えられ、巨大隕石として地表まで落下すると、激しい衝突によって円形のクレーターができます。リース・クレーターは、約1450万年前に形成された直径約25kmの巨大なクレーターです。凄まじい衝撃によってできたシャッターコーン、瞬間的に高温になり岩石が融けてできたインパクトメルト、岩石が瞬時に超高温になって気体として上空に吹き出されてできたテクタイトなどが展示されています。これらは隕石衝突によって地

球上で形成される副産物のようなものです。同じ展示ケース内に、モドック隕石（アメリカ合衆国）を展示していますが、リース・クレーターをつくった隕石は、あまりの衝撃に形を残さなかったと考えられています。立体地図をみると、その衝撃の大きさやクレーターの規模を感じていただけます。また、リース・クレーターの内側には、ドイツの観光名所をつなぐロマンチック街道の主要都市のひとつであるネルトリンゲンがあります。ネルトリンゲンは円形の城郭をもつ中世都市で、その遠方に円形のクレーター壁が取り巻いているようすもご覧いただけます。

太陽系の誕生と地球をつなぐ位置づけとして生まれた新しい展示を、ぜひご覧ください。

（資料課 諸橋靖子）



「巨大隕石の衝突とクレーター形成」の展示



シャッターコーン（ドイツ、シュタインハイム・クレーター）

啓蟄

季節の話題

「陽気地中にうごき、ちぢまる虫、穴をひらき出ればなり」これは1787年に太玄斎らに記された「こよみ便覧」中の「啓蟄」の解説です。啓蟄とは、1年を24等分して季節の名称をあてはめた「二十四節気」の「立春」、「雨水」に続く3番目で、今年は3月6日にあたります。この頃は、春が近づき、冬眠していた虫が地面から出てくる季節であるという意味です。

さて、この頃に活動をはじめ「ちぢまっていた虫」とは何でしょう。昔はさまざまな小動物をまとめて「虫」とあらわし、昆虫のほか、カエルなども含みます。地域によって差はありますが、関東では2月中旬頃にニホンアカガエル、3月中旬から下旬頃にアズマヒキガエルが一度冬眠から覚めて繁殖活動をするので、田んぼや池で卵やオタマジャクシをみる事ができます。また、早ければ3月上旬には蛹で越冬していたモンシロチョウが羽化し、飛びはじめるかもしれません。

ところで近年、モンシロチョウの初見日が遅くなっているという報告があります。越冬中のモンシロチョウの蛹は、ある程度の低温にさらされた後でなければ

羽化しません。これは、冬の暖かい日に間違っ羽化しないことに役立っています。温暖化の影響で冬期の気温が高くなり、低温にさらされにくくなったのが初見日の遅れの一因ではないかと考えられています。

関東では多くの動物が活動をはじめめる時期は3月下旬頃といわれます。だんだんと寒い日も少なくなってきました。家にちぢこまっていた方も野外へ「虫」を探しに出かけてみませんか。（資料課 中川裕喜）



モンシロチョウ

（撮影：今井初太郎）

トピックス

○シニア向け自然大学を開催しました

当館では、本年度から、自然についての造詣を深めたい、シニア向けの連続講座をはじめました。

この講座では「身近な自然」を共通テーマに、当館の学芸員が、自らの研究成果を生かしたレクチャーを行います。12月～2月にかけて行われた以下の3回の講座には、毎回20名以上の参加者がありました。

12月5日(金) 茨城のコケを知る

1月9日(金) 外来種天国・いばらき

2月6日(金) 岩石に記録されたマグマの動き

募集は毎回行うので、興味がある講座のみの参加も可能ですが、3回の講座すべてに参加された方には、修了証が発行されます。今回は、7名の方に授与することができました。

この講座の目的のひとつに、地域の自然観察インストラクターを育成したいということがあります。そのため、専門性が高い内容を、わかりやすくお伝えするように心がけています。より詳しく身近な自然について学びたい方にはうってつけの講座です。

27年度は、前期も連続講座を開催して、修了証を授与する機会を増やす予定です。より多くの皆さんの参加をお待ちしています。(教育課 石田容之)



茨城の自然を学ぶ受講者

○中1フリーパス継続します

当館の20周年記念事業のひとつとして、平成26年度に中学校に入学した県内のすべての中学1年生に配付した「中1フリーパス」は、今年4月に入学する平成27年度の中学1年生にも引き続き配布します。このフリーパスは、多くの中学生が科学に興味をもち、理科の学習に博物館を役立てていただくことを目的としています。さらに、幼児や小学生と比べて博物館に来る機会が少なくなる中学生にもっと来館してほしいというねらいもあります。

今年度は、すでに2月末時点で773名に利用していただいています。中1フリーパスで来館した皆さんには簡単なアンケートに答えていただきましたが、博物館の近くの中学生は友だち同士で連れ合っ

て来てくれた方が多かったことがわかりました。生徒一人一人の手に直接フリーパスが届いたことで、友だちや家族と一緒に来館するきっかけになったのではないかと思います。

中1フリーパスは、中学1年生の間に1回以上来館



中1フリーパス

することにより2年生まで、さらに、2年生の間に1回以上来館することで3年生まで有効期限が延長されます。新中学1年生の皆さんも、中1フリーパスで来館して、博物館を理科の学習に役立ててください。

(企画課 鈴木 肇)

○サンデーサイエンス5万人達成

12月14日(日)に「サンデーサイエンス」は記念すべき参加者合計5万人を達成しました。このイベントは1995年1月からはじまり、毎週日曜日に行われてきました。動物、植物、地学とそれぞれの内容を楽しみながら勉強することができるイベントです。これらを教育普及プログラム集としてまとめ、当館ホームページ上で広く紹介しています。

当日は「身近な植物で野草ペーパーをつくろう」をテーマに植物のレクチャーが行われ、合計22名の参加者が紙づくりを体験しました。「昔ながらの紙づくりりを知ることができてよかった」「ものづくりの楽しさを子どもたちに体験させられてよかった」などの感想が寄せられ、手づくりの紙づくりを親子で楽しんでいました。

博物館では、ほかにたくさんのイベントを実施しています。多くの来館者に、さまざまなイベントを楽しんでいただけると幸いです。今後も魅力あるテーマを考案し、来館者が楽しめるイベントを考えていきます。(教育課 小泉直孝)



5万人達成の記念撮影

開館20周年記念講演会



カリフォルニアの植物について講演するボーンスタイン氏



ランチョ・ラ・フレアについて講演するファレル氏

当館とロサンゼルス郡立自然史博物館（以下、ロス博）は1998年に姉妹館関係を締結しました。当館が開館20周年を迎えた2014年には、ゲスト2名を招き、講演を行っていただきました。

11月15日には、ロス博のキャロル・ボーンスタイン氏による講演会「ようこそ！カリフォルニアの植物の世界へ」を行いました。ボーンスタイン氏は植物学のスペシャリストで、2013年にロス博の開館100周年を記念してオープンした野外展示“ネイチャー・ガーデン”について講演していただきました。カリフォルニアの野生植物などについて学べる庭園のデザイン、そこで行われる自然環境学習プログラム、そして都市における動植物の生態研究と、充実の講演内容でした。

そして12月20日には、アシュリング・ファレル氏による講演会「ランチョ・ラ・フレア/アイスエイジからのメッセージ」を行いました。ファレル氏はロス博の分館であるページ博物館のコレクションマネー

ジャーという博物館の資料管理における責任者で、「マンモスが渡った橋」展で特集している世界的化石産地“ランチョ・ラ・フレア”についてお話しいただきました。ランチョ・ラ・フレアはロサンゼルス市内にあるタールの池（タールピット）が散在する地域で、サーベルタイガーなどの氷河期の動植物化石が大量に発掘されることで知られています。化石発掘の歴史、博物館の成り立ち、そしてこれまでの研究成果と、とても興味深い講演内容でした。

当館は、今後も海外との交流を積極的に進めていきたいと考えています。（教育課 加藤太一）

編集後記

今号から、新キャッチコピーの「小さな好きから 大きな夢へ ミュージアムパーク」が表紙下を飾っています。当館には、小さな自然科学に対する好奇心を、大きな夢に膨らませることのできる展示や野外施設、イベントが多数あり、大きな夢へのお手伝いができる職員がおります。ぜひ博物館に足をお運びください。（K・N）

【交通案内】



＜車ご利用の場合＞

- 常磐自動車道谷和原ICから20分
- ＜鉄道・バスご利用の場合＞
- 東武アーバンパークライン（野田線）愛宕駅下車
～茨城急行バス「岩井車庫行き」乗車
～「自然博物館入口」下車、徒歩10分
- つくばエクスプレス、関東鉄道常総線守谷駅
下車～関東鉄道バス「岩井/バスターミナル行き」
乗車～「自然博物館入口」下車、徒歩5分
- ※事前に発車時刻等をご確認ください。



【開館時間】

9:30から17:00まで
(入館は16:30まで)
※ペット、遊具、テ
ブル、椅子及びテン
ト等のお持ち込みは
ご遠慮ください。

【入館料】

区分	本館・野外施設		野外施設 のみ	年間 パスポート
	企画展開催時	通常時		
一般	740円 (600円)	530円 (430円)	210円 (100円)	1,540円
高校・大学生	450円 (310円)	330円 (210円)	100円 (50円)	1,030円
小・中学生	140円 (70円)	100円 (50円)	50円 (30円)	310円

(注)：()内は団体料金(20名以上)
未就学児・満70歳以上の方・障害者手帳をお持ちの方は入館無料です。
次の日は入館料が無料です。

- 5月4日(みどりの日)
- 6月5日(環境の日)
- 11月13日(茨城県民の日)
- 3月21日(春分の日)
- 高校生以下の児童・生徒は毎週土曜日
(ただし、春・夏・冬休み期間を除きます。)

【休館日】

- 毎週月曜日
- ※3月30日(月)は開館します。
- ※5月4日(月)、5日(火)、6日(水)は開館し、
5月7日(木)が休館となります。
- ※6月15日(月)～6月20日(土)館内整理のため
休館となります。

